

池状構造物等 調査工法の比較表

項目 \ 名称		ROV（水中ドローン）調査	潜水士調査
工法		不断水工法	
調査対象		池状構造物、取水施設、管渠内部、河川、ダム等	
調査内容		水中構造物調査、堆積調査	水中構造物調査、堆積調査 計測、サンプル採取、耐震診断調査
		△	◎
調査範囲	延長距離	75～300m	50m～200m
	水深	100m未満	40m未満
	口径	口径φ400mm以上	口径φ600mm以上
記録方法		動画・静止画（CADデータによる報告書作成）	
経済性		軽機材で調査員もROVオペレーターと記録補助員で調査が可能となるため、労務人数が削減でき安価である。	ROV調査と比較すると、作業環境によって特殊な機材や潜水士の人員が必要となるため金額が高くなる。
		◎	○
安全性		電氣的トラブルや、誤操作によるトラブルが起こらない限り安全である。	作業に従事する潜水士の技術や経験により安全性が左右される。 施工管理や安全管理には熟練を要する。
		○	△
設計時の 主な留意点		水の透明度や操作の熟練度によって成果品に違いがでる ROVは流れの影響を受けやすいため、操作に影響のない静水であることが望ましい。また、複雑な構造物など障害物によって調査範囲が限定されてしまう可能性がある。	水の透明度によって成果品に違いがでる。潜水士の安全面を考慮して、作業環境に適した施工管理や安全管理が必要となる。